種生物学会ニュースレター NO. 46&47

The Society for the Study of Species Biology news letter 46&47 October 2013

目次

- 1. 新会長からのごあいさつ
- 2. 第45回種生物シンポジウムのご案内
- 3. 第6回種生物学会片岡奨励賞受賞者選考報告
- 4. 第6回片岡奨励賞受賞者からの研究紹介
- 5. 第 44 回種生物シンポジウムの記録 ポスター賞選考報告 シンポジウム参加記
- 6. 2012 年度総会の記録
- 7. 会計報告
- 8. 会費納入のお願い
- 9. 会員異動
- 10. 書評
- 11. 役員一覧

1. ごあいさつ

種生物学会会長 川窪 伸光

なんとか、本年度もシンポジウムを開催できます。例年にない格別な喜びが沸いてきます。はじめに、ニュースレター発行ならびに HP の充実等が遅れていることをお詫びいたします。2013 年度新体制で学会庶務を担当して、あっという間に 9 ヶ月が経ってしまいました。昨年度まで外部委託していた会務を、今年度から自前の学会事務局(愛知教育大)がすべて行うという大変更に、私の不慣れな会務進行がかさなり、ご迷惑をかけている次第です。

しかし、学会副会長の大原雅さん、庶務幹事の渡邊幹男さん、会計の常木静河さん、メールニュース担当の可知直毅さん、渉外担当の藤井伸二さんらの強力な新執行部体制は、新たに生じた膨大な学会の事務仕事を着実にこなしています。さらに英文誌編集委員会(大原雅編集長)、和文誌編集委員会(陶山佳久・藤井伸二編集長)のたゆまぬ努力は、種生物学会出版物をより充実させています。ここに、本年度シンポジウム開催のお知らせをできることに、私はささやかな安堵を感じています。

さて会長としての挨拶をと振り返ってみて、なんと私は大学院修士課程入学と同時に種生物学会に参加したことを思い出しました。それから 30 年以上も時が経ってしまったことに、この原稿を書きはじめて気づき唖然としています。なぜなら、つい昨日のような感覚で、学会での活動の多くを覚えているからです。大学での日常生活の 30 年間は、ほとんど覚えていないのに、初めて種生物学会のシンポジウムに参加して、衝撃を受けた記憶は瞬時に鮮明に蘇ってきます。不思議です。

当時の私は、大学院の新入生としてワクワク感が消えて、次第に修士研究の内容に不安を感じ、なんともいえない閉塞感の中を漂っていました。そんな不安な気持ちで種生物学シンポに参加したのです。そして、びっくりしました。自分と同年代や先輩たちが、実に楽しそうに研究話を語り、そして信じられないことに、私の閉塞感をまるで我が身のように理解してくれるのです。さらに、当時の私には十分には理解できないほどの高度なコメントもいただき、その上で多様な角度からの励ましもいただきました。今になって思えば、実に最適、最良、最高のコメントばかりであったことに気づきます。この原稿を綴りながら、30年前からの学会の仲間たちに、今更ながら感謝してしまいます。とはいえ、「その当時から成長したのかよ?」と今、仲間に問われても、頭をかくばかりですが・・・。しかし、今なお、種生物学会が私にとって、当時と変わらず刺激的で、その上、私を励ます機能を果たし続けていることに驚きを隠せません。

私のイメージする種生物学会の「かたち」は、分類学・生態学・遺伝学を正三角形の角として、中心に進化学が座り、三角形の内側に、農学、生物学、環境科学などの生き物学

問の学徒たちが集っています。私は、この図の中で、シンポジウム会場にて毎年興奮し、 学会誌を読み込んでは溜飲を下げます。その経験をもとに、微力ではありますが、この魅力的な知の場を維持し、この学会に参加するすべての方々が、新たな刺激を得ていただけるように、学会庶務を執行部・幹事会・編集委員会のみなさんと進めてまいります。

是非とも, 種生物学会をお楽しみください。

第45回 種生物学シンポジウムのご案内

-温泉につかり、あつい議論を-

実行委員長 新田 梢(九州大学)

今年の種生物学シンポジウムは,合宿形式学会を楽しめるように、全国屈指の温泉地「大分県別府」にて開催します。温泉につかり,夜中まであつい議論を交わしましょう。どうぞ奮ってご参加ください。今回は、近接する2つの会場を利用して、利便性を図りました。受付・プレシンポジウム・ポスター発表・食事や夜の交流会等は宿泊する「亀の井ホテル別府店」(JR 別府駅より徒歩5分)にて開催します。シンポジウムと総会は,会場を移し「別府市ふれあい広場サザンクロス(亀の井ホテルから徒歩6分程)」にて行います。

また今回,新しい試みとして,期間中の一時保育施設を斡旋いたします。亀の井ホテルから約5分,シンポジウム会場であるサザンクロスに近い秋葉保育園(日曜可,24時間対応可)をご用意いたしました。お子様連れでの若手の皆さまのご参加もお待ちしております。

全体のスケジュール

11月29日(金)		会場
12:00-17:00	【各委員会】	サザンクロス
17:00 より	【受付】	亀の井ホテル
18:00-19:00	【夕食】	亀の井ホテル
19:00-20:30	【プレシンポジウム】	亀の井ホテル
21:00-23:00	【交流会】	亀の井ホテル
11月30日(土)		
9:00-11:30	【シンポジウム 1 午前の部】	サザンクロス
11:45-12:45	【昼食】	亀の井ホテル
12:00-14:15	【ポスター発表】(審査コアタイム 13:00-14:00)	亀の井ホテル
14:30-17:00	【シンポジウム 1 午後の部】	サザンクロス
17:10-18:10	【種生物学会 2013 年度総会】	サザンクロス
19:00-21:00	【懇親会】	亀の井ホテル

(片岡奨励賞・Plant Species Biology 論文賞・ポスター賞授与式含む)

12月1日(日)

9:00-12:00【シンポジウム2 午前の部】サザンクロス12:15-13:00【昼食】亀の井ホテル13:15-15:00【シンポジウム2 午後の部】サザンクロス

15:00 第45回種生物学シンポジウム閉会

11月29日(金)

プレシンポジウムでは、大阪大学未来戦略機構の細田一史さんをお招きし、「微生物による実験生態系の進化」について講演していただきます。細田さんは、気鋭の若手研究者で、細胞内共生や細胞間相互作用等の適応の実験室内進化についてご研究されています。種生物学会の会員の多くが、野外の動植物が研究対象で、共生や生物間相互作用、環境適応に興味があるため、実験室内で共生系を作り出すという「人工共生系」のご講演には、研究のヒントがたくさんありそうです。 ご研究の面白さやエピソードもお話いただけるのではと期待しています。 ぜひ、刺激的なプレシンポをお楽しみください。

11月30日(土) シンポジウム1

「進化生態学理論の最前線:数理モデルの構築,応用と展望」 企画者: 入谷亮介(九大院・システム生命科学府)

企画趣旨:「理論」は,学問において,原理の考え方・捉え方のフレームワークを提供し,複雑な現象の見通しを良くする役割を担う。進化生態学においても,理論やその枠組みに基づいた数理モデルが大きな示唆を与えてきたことは,周知の事実である。近年,多くの観点から,進化・生態学を理解・説明するための理論が提唱され,その検証が進められている。それでは,数理モデルの構築は,いったいどこまで何を明らかにすることに成功しており,今後どういったことを明らかにすることを目指すべきなのであろうか。本シンポジウムでは,進化生態学の様々な現象に対する最前線の理論的アプローチとその発展,展望を提供する。それにより,理論研究と実証研究とがいかに結び付けられるべきか,議論を交わしたいと考えている。

9:00-9:05 企画趣旨 入谷亮介(九大院・システム生命科学府)

9:05-9:40 岩田洋佳(東大院・農学生命科学研究科)

「ゲノミックセレクションの数理:ゲノムと表現型の関係のモデル化とそ

れに基づく高速育種」

9:40-10:15 野下浩司(九大院・システム生命科学府)

「生物のかたちのモデリングと定量化: 3Dイメージデータが拓く個体発生解析の可能性と2Dイメージデータの有効活用」

10:15-10:20	休憩
10:20-10:55	合原一究(理化学研究所·基礎科学特別研究員)
	「数理モデルと先端的計測技術に基づく夜行性動物の行動解析」
10:55-11:30	田村光平(東大院・理学研究科)
	「進化の数理の人類学への応用:文化の「進化」を科学する」
14:30-15:05	立木佑弥(北大院•地球環境科学研究院)
	「植物の生理から進化を考える:樹木マスティングを例に」
15:05-15:40	入谷亮介(九大院・システム生命科学府)
	「寄生者の水平感染が形成する,社会行動と移住行動」
15:40-15:55	休憩
15:55-16:30	大槻久(総研大・先導科学研究科)
	「血縁淘汰理論を本当に理解する: $rB\!\!-\!C\!>0$ を超えて」
16:30-16:40	近藤倫生(龍谷大・環境ソリューション工学科)
16:40-17:00	総合討論

12月1日 シンポジウム2

生き物たちの「におい」の世界~多様な生物間相互作用に迫る 企画者:廣田峻,吉村友里,新田梢(九州大学)

企画趣旨:「におい」は動植物を問わず,送粉や種子散布といった繁殖活動から,被食防御など食う一食われるの関係に至るまで,生命活動の様々な場面で利用されていることが明らかになってきました。近年では,分析技術の発達により,これらの生物間相互作用に介在する物質やその認識メカニズムまで解明されつつあります。本シンポジウムでは,物質同定や種間比較,行動観察など様々なアプローチで「におい」を介した生物間の現象を研究されている方々をお招きし,その魅力に迫りたいと思います。そこから,複雑に絡み合う生物間相互作用を紐解く上での「におい」研究の重要性や意義,今後の展望について議論したいと思います。

9:00- 9:10	企画趣旨 廣田峻(九)	州大学)
9:10- 9:50	岡本朋子(森林総研)	「匂いで誘う -送粉者を導く花の戦略-(仮)」
9:50-10:30	大村尚(広島大学)	「チョウの訪花行動を制御する花香成分」
10:30-10:40	休憩	
10:40-11:20	米谷衣代(京都大学),直	直江将司(東京大学)

「果実の香りの多様性と動物散布における適応的意義を探る」

11:20-12:00 吉村友里(九州大学)

「カエルの警告臭~捕食者に対するツチガエルのニオイ~(仮)」

13:15-13:55 石崎智美(新潟大学)

「キク科ヨモギ属 sagebrush における匂いを介したコミュニケーションと被食防衛」

13:55-14:35 塩尻かおり(京都大学)「匂いが織りなす生態系」

14:35-15:00 総合討論

参加•宿泊申込

参加申し込みは原則としてオンラインの登録フォームにて受け付けます。 http://www.speciesbiology.org/2013/09/-norma.html

締め切り11月11日(月) [参加費早割 10月25日(金)まで]

締め切り以降は、登録フォームでの申込は受け付けられませんのでご注意ください。登録フォームで申し込み後、速やかに合計金額のお振り込みをお願いいたします。実行委員会での照合のため、登録フォームに払込郵便局(又は他金融機関)と払込予定日のご記入をお願いします。

参加費等

- •参加費は、10月25日(金)までの申し込みで、学生会員3000円、一般会員5000円、非会員(学生含む)7000円です。10月26日(土)~11月11日(月)までの申し込みでは、それぞれ1000円ずつ、11月12日(火)以降は当日参加料金(現地で現金にて支払い)でそれぞれ2000円ずつ高くなります。
- ・宿泊は1泊8000円で、11月11日(土)まで宿泊の申込みを受け付けます。それ以降は、ホテル宿泊のため、申込みを受け付けられません。また、11月12日(火)以降に変更・キャンセルされる場合には、キャンセル料が発生することがあります。
- ・部屋は、男女別の相部屋(4 or 6 ベッド部屋)になります。部屋には,バスタオル・歯ブラシ・浴衣・シャンプー・ドライヤー等の設備があります。詳しくはホテル情報 http://www.kamenoi.com/beppu/rooms/をご覧ください。
- 2日目の懇親会費は、学生会員1000円、学生非会員2000円、一般会員5000円、一般 非会員6000円です。懇親会のみ参加されるかたは、一律6000円となっております。
 - ※ 現在非会員の方でも、11月11日(月)までにご入会されますと、登録フォームでの申し込み時に、学会員と同じ費用になります。登録フォームでの参加申し込み前に、是非、種生物学会へご入会をご検討ください。種生物学会への入会申し込みは、http://www.speciesbiology.org/entree/からお願いいたします。当日もご入会は可能ですが、その場合は会場で現金払いとなります。

参加費・宿泊費の振り込み

締め切り 11月11日(月) [参加費早割 10月25日(金)まで]

参加費および宿泊費を以下の振替口座までご送金ください。

※ 原則として、参加費等の領収証は発行いたしませんが、機関手続き等の都合で、領収証が必要な方がい らっしゃいましたら、登録フォームの備考欄に必要事項をご記入ください。

ゆうちょ銀行 口座番号:01720-4-73747

口座名称:第45回種生物(ダイヨンジュウゴカイシュセイブツ)

他金融機関からのお振込の場合は、以下をご指定ください。

店名: 一七九(イチナナキユウ)店(179), 預金種目: 当座, 口座番号: 0073747

ポスター発表の募集

発表申込・要旨提出締め切り 11月11日(月)

- ・ポスター発表を希望される方は、参加申込みと同時に、ポスター発表の申込みも行ってください。
- ・ポスター発表の主たる発表者(演者)は,種生物学会会員に限ります。この機会に種生物学会 へご入会を希望される方は、学会ホームページの入会案内 http://www.speciesbiology.org/entree/よりご入会ください。
- ・要旨は、A4 サイズ自由形式 1 ページ(Word または PDF 形式)で作成し、メール添付で、メールタイトル「種生物要旨:演者氏名」にて実行委員会 要旨集担当・山尾僚 yamawo.aki(@マーク)gmail.com までお送りください。冒頭にタイトルと発表者(所属)をご記入ください。 図表も含めることもできますが、印刷はモノクロです。
- ポスターはAO縦サイズ,またはそれに準じた大きさでご準備ください。
- ポスター会場は 11 月 30 日(土)のみ設定する予定です(亀の井ホテル)。ポスターは発表時間前の 11:30~13:00 に貼り出してください。30 日 21:00 以降は,ポスターを眺めながら交流会を行いますが,1 日の朝までにはポスターをはがすようにしてください。

一時保育施設のご案内

実行委員会では,期間中の一時保育施設としてサザンクロス近くにある「秋葉保育園」 (http://www.akibahoikuen.com)での受け入れ,就学前児で15名,学童で7名までを御用意しております。

秋葉保育園 〒874-0943 大分県別府市楠町 1-4 TEL/FAX (0977)25-2244

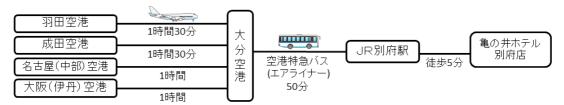
・利用料金: 1時間あたり 500円(8:00-18:00), 800円(18:00-翌 8:00)

- ・申込みは、参加登録フォームにてお願いいたします。申込み時のわかる範囲で構いませんので、託児内容(人数・月年齢・託児予定日時)を備考欄にご記入ください。
- 利用料金の支払いは,実行委員会を通して行います。実行委員会から一部補助も検討して おります。詳細につきましては,申込みをされた方に,実行委員会から直接ご連絡をさせて いただきます。

会場案内

- ① 亀の井ホテル別府店(大分県別府市中央町 5-17) 別府駅より徒歩 5分← 受付会場
- ② 別府市ふれあい広場サザンクロス (大分県別府市千代町 1-8) 別府駅より徒歩 6分

[空路(大分空港利用)]



大分空港-JR 別府駅 空港特急バス(片道 1450 円/往復 2500 円)随時

※ 会場への交通手段として、この他にフェリー(大阪南港から 12 時間程度)、高速バスなど も利用していただくことができます。



会場へのアクセスマップ

http://www.city.beppu.oita.jp/06sisetu/southerncross/01riyou/access.h

3. 第6回種生物学会片岡奨励賞 選考報告

選考委員会は、推薦のあった候補者の研究業績および種生物学会での活動について、慎重に調査審査し、最終選考会議を10月31日に京都大学でおこないました。その結果、選考委員の全員一致で、以下の2名に片岡奨励賞を授与することを決定いたしました(五十音順)。

- 荒木 希和子 氏(京都大学)
- 布施 静香 氏(兵庫県立人と自然の博物館)

片岡奨励賞選考委員: 井鷺裕司·川窪伸光·西脇亜也·吉岡俊人

《受賞理由》

荒木希和子 氏 (京都大学)

花・種子を介した有性繁殖と地下茎などによる栄養繁殖の両方を行うクローナル植物は、植物の個体群生態学ならびに繁殖生態学において大変に興味深い植物群である。荒木氏は、クローナル植物であるスズランを対象として、その繁殖様式と集団維持機構を進化生態学の視点から解明してきた。実は、クローナル植物の野外研究には、多くの困難が存在する。なぜなら、植物体がクローナルであるが故に、個体性の認識が難しく、「集団の空間的な広がり」や「個体レベルの適応度」の評価が困難だからだ。このような問題に対して荒木氏は、種子繁殖の特性や地上シュートのマーキングとその追跡調査を丁寧に緻密に行い、野外生態データを集積するとともに、マイクロサテライトマーカーを用いた遺伝解析実験を行い、スズランにおける個体の識別法を確立した。その上で、上記の結果を統合して評価するために数理モデルを使った数理解析を行いスズランの繁殖様式と集団維持機構を解き明かした。これらの丹念に自然の実態を探求した研究成果は、クローナル植物の種分化の新たな実態を明らかにした点で学術的に高く評価できる。なお、種生物学会では、シンポジウムの企画・講演、ポスター発表を積極的に行い活発な学会活動を展開し、広く種生物学分野全体の発展に貢献している。

布施 静香 氏 (兵庫県立人と自然の博物館)

植物の系統分類学の近年の発展にはめざましいものがあり、その背景には分子系統解析がある。布施氏の研究成果は、まさに分子系統解析に基づく最新の分類学的成果である。 しかし注目すべきは、布施氏は、その研究過程で、野外での生態観察と大量の植物さく葉標本に基づく解析をも丹念に続け、その上に分子系統解析結果を重ねた点である。布施氏 の研究は、以下の4つに大別できる。まず単子葉植物全体の分子系統樹構築に関する研究では、matk 遺伝子を用いることによって、rbcL 遺伝子で見いだされていた植物分類群間の系統関係を更に詳細に解析した。また、当時混乱していたショウジョウバカマ属の分類を、形態と分子の両面から解析することで明瞭に整理した。そして、キンコウカ科では、ノギランが同科で最初に分岐した植物群で、多くの祖先形質を維持している種であることを示した。その上、布施氏は、植物さく葉標本の学術的価値を深く理解し、先の東日本大震災によって被災した植物標本の復元に積極的に関与、自ら行動し、その実践から得た被災植物標本復元方法をいち早く公表した。この標本復元法は、世界でも類を見ない貴重な研究成果であり、社会的貢献を伴った重要な学術的活動といえる。なお種生物学会では、シンポジウムの講演・ポスター発表を積極的に行い活発な学会活動を展開し、また学会運営にも尽力している。

4. 第6回片岡奨励賞受賞者からの研究紹介

荒木希和子

このたびは種生物学会片岡奨励賞を受賞できましたことを、大変ありがたく光栄に存じます。このような栄誉ある賞を頂くことができたのも、指導教官の荻野和彦先生、大原雅先生、工藤洋先生をはじめ、野生生物の魅力と調査方法を教えてくださった河野昭一先生、統計解析でお世話になった島谷健一郎さん、久保拓弥さん、調査や実験のご指導・援助をいただいた研究室の諸先輩後輩の皆様、他多くの方々のお蔭であり、この場を借りて厚くお礼申し上げます。また種生物学会は、私が3回生で初めて参加した学会で、当初から数多くの優秀な研究者の方に出会い、有意義な助言や議論をしていただけたことが、今の私の研究の礎となっており、心より感謝しています。

私は、植物の中でもクローナル植物を中心に、野生生物の生態・生活史に関する研究を行ってきました。クローナル植物は、種子繁殖とともに栄養器官からのクローン成長によっても新たな植物体(ラメット)を生産します。個々のラメットは、互いに分離しても独立で生存することができ、野外ではこのラメットが個体として認識されがちです。しかし、遺伝的に同一なものを個体とするならば、ラメットはあくまで個体の一部であり、ラメットの集合体が個体(ジェネット)に相当します。したがって、野外集団において見た目でジェネットを識別することは困難であり、ジェネットの挙動を把握することが容易ではありませんでした。しかしながら、適応度を評価する単位はあくまで遺伝的個体であり、ジェネットレベルでの現象を理解することが重要です。

そこで私は、修士・博士課程においてスズラン(Convallaria keiskei)の自生集団を対象に、遺伝マーカーを用いてラメットの遺伝子型を特定することにより、ジェネットを識別

にした上で様々な生態学的調査を行いました。 初めに数十メートルに及ぶ広域と全ラメッ トの配置を対象とする複数の異なるスケールで遺伝子型を調べることで、クローンの広が りを正確に把握することを試みました、次に、自家不和合性の繁殖特性を示すスズランで は、このようなクローンの広がりが、ポリネーターの誘因効果や訪花パターンを通して、 種子繁殖成功に影響することを明らかにしました。また、ラメットのデモグラフィを調べ、 それをジェネットごとの特徴として示す統計手法を考案することにより、ジェネットレベ ルでのデモグラフィを評価しました、例えば、ジェネットサイズは各ラメットの成長と新 規加入ラメット数の総和であるので、これを正規分布で集約することで表現し、その分布 を比較することでジェネットの成長率を推定する方法を考えました。さらに、地下茎を掘 り起こしてラメット間の連結を調べ、それを地上部の挙動と組み合わせることで、ラメッ ト・ジェネットレベルでの種子繁殖とクローン成長の頻度と経年変化を把握し、クローナ ル植物における繁殖のデモグラフィを評価しました。このような性質をジェネット間で比 較すると、ジェネット間の相違を調べることができ、その結果、同所的に生育するジェネ ットでも成長や繁殖パターンが異なっていることなどが見えてきました。一方で、ラメッ トサイズは同一ジェネットでも場所によって異なり、異なるジェネットでも同所的に分布 しているラメット間では類似しているという周囲環境の影響を示唆するようなパターンも 検出されました.

単一ジェネットの占有する空間内でも環境不均一性が存在するため、同一遺伝子型を有するラメットは異質な環境に生育していると考えられます。さらに、クローン内の1ラメットでも生存していればジェネットとして生存し続けるので、そのジェネットが経験する時間的な環境変化も大きいものと思われます。そのため、クローナル植物では野外環境での生育において個体内で生じるような変異が重要な役割を果たしている可能性が考えられます。そこで現在は、タネツケバナ属の植物を材料に、クローナル植物の環境適応へのメカニズムとして、ジェネット内での変異を生じさせるエピジェネティクスや遺伝子発現に着目して研究を進めています。クローナル植物における"遺伝的に同一なラメットを多数生産する"という特性は、遺伝的要因と環境要因を分離するのに理想的な系です。このような特性を生かして、栽培実験や分子生物学的分析を行うことで遺伝的変異(個体間変異)と個体内変異の環境応答に対する役割が解明されれば、野外環境における生物の適応メカニズムについて新たな知見が得られるのではないかと考えています。このたびの受賞を受けましたことを胸に、これからも、努力を重ねて精力的に研究に励んでいきたいと思います。

6. 第44回種生物シンポジウムの記録

実行委員長 川北 篤 (京都大学)

開催日:2012年12月7日(金)~9日(日)

開催地:奥琵琶湖マキノパークホテル&セミナーハウス(滋賀県高島市)

参加者数 (参加費免除者 6 名を含む)

シンポジウム 157名

(内訳:一般会員64名,一般非会員34名,学生会員30名,学生非会員29名)

プレシンポジウム

• 「好蟻性昆虫の多様性と系統進化」丸山宗利(九州大学総合研究博物館)

シンポジウム1「タケとササの種生物学」

企画者: 小林剛(香川大), 久本洋子(東京大), 福島慶太郎(京都大), 鈴木重雄(立正大), 河合洋人(岐阜大), 竹林景観ネットワーク(BaLaNET)

総合討論コメンテーター:井鷺裕司(京都大)

第 1 部「近年の分子系統解析・分子機能解析が変える従来のタケとササの分類体系と生活 史の概念」(コーディネーター:久本洋子)

- •「タケ・ササ類の分類体系と分布類型・種分化」小林幹夫(宇都宮大名誉教授)
- •「タケとササの分子生態学」陶山佳久(東北大)
- 「開花の個体性と繁殖様式」北村系子(森林総研)

第2部「巨大クローナル植物の侵入が引き起こしている生物多様性と生態系機能の変化: 種生物学と群集生態学・生態系生態学との接点」(コーディネーター:福島慶太郎)

- 「冷温帯林の炭素・窒素動態におけるササの役割」福澤加里部(北海道大)
- •「モウソウチク林における水循環:他の森林タイプとの比較」篠原慶規(九州大)
- •「モウソウチク林におけるケイ素の循環と植物ケイ酸体としての挙動」梅村光俊(名古屋大)
- •「日本に生育するモウソウチクの生活史形質の可塑性と林分の構造・機能との関係」 福島慶太郎(京都大)

第3部「タケとササの侵入・分布拡大に種生物学は何ができるのか?:種生物学の新たな

役割と社会との接点を探る」(コーディネーター:鈴木重雄・河合洋人)

•「拡大を続ける竹林への対峙と竹林再生活動に必要な情報-竹林はどこにあるのか、どこまで広がるのか、誰がどのように取り組むのかー」鎌田磨人(徳島大)

シンポジウム2「エコロジカル・エピジェネティクスー可塑性メカニズムの適応・進化的意義を探る一」

企画者: 荒木希和子(京都大), 土畑重人(琉球大)

総合討論コメンテーター:田中健太(筑波大)・長谷部光泰(基生研)

- •「クロマチン修飾と非コード RNA が制御するエコロジカル・エピジェネティクス」玉田 洋介(基生研)
- •「アサガオの模様を生み出すエピジェネティクス」星野敦(基生研)
- •「環境ストレスとゲノム進化~高温ストレス活性型トランスポゾンと宿主の攻防~」伊藤 秀臣(北海道大)
- •「クローン植物集団におけるエピジェネティック変異の空間構造」荒木希和子(京都大)
- •「多様なエピゲノムからの選択によって進化が実現する:細菌の配列特異的 DNA メチル 化にもとづく仮説」小林一三(東京大)
- •「ゲノム比較から探る哺乳類ゲノムインプリンティングの起源と進化」鈴木俊介(信州大)
- •「予測されたエピジェネティクス:コンフリクト理論でひも解くゲノムインプリンティン グの進化」土畑重人(琉球大)
- 「エピジェネティクス解析手法ーいくつかの具体例とともにー」西村泰介(名古屋大)

ポスター発表

- P1. スズメガの花選好性に及ぼす蜜報酬の影響。 廣田峻, 新田梢, 安元暁子, 矢原徹一(九州大・生物)
- P2. 被食防御戦術の可塑的変異-花外蜜腺植物における生育場所に応じた異なる防御形質の適用-. 山尾僚(佐大農),波田善夫(岡山理大総情),鈴木信彦(佐大農)
- P3. ハクサンハタザオの有毛型と無毛型に対するハムシの頻度依存餌選択。佐藤安弘,川越哲博,工藤洋(京大・生態研)
- P4. オオバキスミレにおける繁殖戦略の種内変異ー開放化・閉鎖花形成パターンの集団間比較 ー. 速水将人(北大・院・環境科学), 細川一実, 木村耕, 大原雅(北大・院・環境科学)
- P5. 持ち去られた花粉は何処へ?送粉者の訪花行動量と花粉運搬量との非相関関係. 坂本亮太, 森長真一(東大・院・総合文化)
- P6. 放置竹林における竹駆除後の新竹再生状況。池田虎三(石川農林総研), 小谷二郎(石川農

- 林総研)、江崎功二郎(石川県白山自然保護センター)
- P7. 琉球列島及び台湾7集団におけるナガミボチョウジの雌雄性。渡邊謙太(沖縄高専), T.Y. Aleck Yang (台湾国立自然科学博物館), 菅原敬(首都大・牧野標本館)
- P8. Host kin-structure and the evolution of host dispersal affected by parasites. 入 谷亮介(九大·院·数理生物),嚴佐庸(九大·院·理·生物)
- P9. 地下部植食に起因する草本の枯死と成長量の減少は植物種とその成長段階により異なる。 角田智詞、可知直毅、鈴木準一郎(首都大院・理工・生命)
- P10. 内陸型ハマダイコンの成長特性一全国の自生集団と比較して一。石塚航(東大・総合文化, CREST), 彦坂幸毅(東北大・生命, CREST), 伊藤元己(東大・総合文化), 森長真一(東大・総合文化, CREST)
- P11. 蝶翅上捕食痕の種間比較. 太田真人(龍大・院・理工・環), 遊磨正秀(龍大・理工・環)
- P12. ウワミズザクラにおける果実色多様性の鳥類誘因効果~メジロは4色構成の房がお好き ~. 辻愛子, 川窪伸光(岐大・院・応用生物)
- P13. 内陸のタブノキ林はどのように成立したのか?~琵琶湖周辺のタブノキ林の成立過程と 遺伝構造~. 渡部俊太郎(滋賀県大・院・環境科学),金子有子(琵琶湖環境科学研究セン ター),前迫ゆり(大阪産大・人間環境),野間直彦(滋賀県大・環境)
- P14. マツブサ・サネカズラに訪花するタマバエ. 高田晃成(岐大・院・教育), 三宅崇(岐大・教育)
- P15. 小面積開花におけるササのジェネット構造と繁殖成功度, 大倉知夏, 松下通也, 井上みずき, 蒔田明史(秋田県立大院)
- P16. クローナル植物集団におけるジェネットサイズの決定要因。 辻本典顯, 荒木希和子, 工藤 洋(京大・生態研)
- P17. 巨大クローナル外来植物モウソウチクの侵入は里山林の構造と現存量をどう変えるか? -8 年間の追跡から-. 小林剛, 里村多香美, 幸喜章朗, 吉本敬史, 山本新, 宗本一平, 新井里菜, 多田壮宏(香大・農)
- P18. 毎週発芽させたシロイヌナズナコホートによる発芽時期ー適応度カレンダーの作成。山口 正樹(京大・生態研)、工藤洋(京大・生態研)
- P19. サビキンの有性世代における媒介者誘引メカニズムについて、本田薫、三宅崇(岐阜大・教育)
- P20. オトシブミの生育に関わる菌の探索、高田惟名(岐阜大・教育)、三宅崇(岐阜大・教育)
- P21. 昆虫種子食害者に対するカワラナデシコの繁殖戦略. 佐竹郁恵(岐阜大・院・教育), 三宅患(岐阜大・教育), 三宅恵子(岐阜大)
- P22. マイクロ RNA を介した制御機構の複雑性進化に関する理論的研究。 秋田鉄也(総研大・葉山), 宅野将平(UC Davis), 印南秀樹(総研大・葉山)

- P23. ヒマラヤ高山帯に適応したセーター植物 Saussurea laminamaensis Kitam. (キク科) の送粉生態学的調査. 中路真嘉 (首都大・院・理工・生命), 池田博 (東大・博物館), Rita Chhetry (Dept. of Plant Resources, Nepal), 菅原敬 (首都大・院・理工・生命)
- P24. 自然植物集団におけるヒストン修飾の季節解析に向けた,クロマチン免疫沈降法の最適化。 西尾治幾(京大・生態研), Diana Buzas (NAIST), 永野淳(京大・生態研), 工藤洋(京 大・生態研)
- P25. シダ植物の葉の内部構造が光合成機能に与える影響. 西田圭佑(京工繊大・院), 半場祐子(京工繊大)
- P26. 異種花粉による自殖誘導(メンター効果): ススキ属とカンキツ属の場合。田中有理佐(宮崎大・院・農)、西脇亜也(宮崎大・農)
- P27. サワシロギクは分断化選択を受けている!?-湿地型と蛇紋岩型の生態的分化,そして"しんどい"中間型-. 大久保理子(大阪府大・院・理),藤井伸二(人間環境大),中山祐一郎(大阪府大・院・生命環境),西野貴子(大阪府大・院・理)
- P28. 広葉樹林の断片化がカスミザクラの交配様式と種子生産およびハナバチ群集に与える効果、永光輝義、滝久智、菊地賢、加藤珠理(森林総研)、石金卓也、前田孝介(東京農大)
- P29. トランスクリプトームからみた地下茎メリステムの特性一頂端・根端メリステムとの比較、 荒木希和子(京大・生態研), 永野惇(京大・生態研, JST・さきがけ), 中野亮平(京大・ 院・理), 北爪達也(基生研), 山口勝司(基生研), 西村いくこ(京大・院・理), 重信秀治 (基生研), 工藤洋(京大・生態研)
- P30. ギャップから林内にかけて分布するチマキザサの現存量と成長特性, 齋藤智之, 杉田久志, 清和研二
- P31. 安価で多検体処理が可能なゲノムワイド多型解析法(改良版 RAD-Seq) および遺伝子発現解析法(RNA-Seq)の開発と提供. 永野惇(京大・生態研, JST・さきがけ), 辻本典顯, 本庄三恵, 荒木希和子, 工藤洋(京大・生態研)
- P32. カンサイタンポポ,セイヨウタンポポ,雑種タンポポの遺伝的多様性と類縁関係。松山周平(京大フィールド研),水貝翔太,森本美樹,名波哲,伊東明(大阪市大理)
- P33. 一対多相利共生における宿主と共生者の共進化動態. 江副日出夫(大阪府大・院・理)
- P34. 森林環境が植食性昆虫の群集構造に及ぼす影響。東郷有城(龍大・院・理工・環境), 遊磨正秀(龍大・理工・環境)
- P35. 琵琶湖流入河川におけるアユの産卵適地、小澤元生、伊藤琢哉(龍大・院・理工・環境)、満尾世志人、遊磨正秀(龍大・理工・環境)
- P36. オオバイヌビワにおける花の匂いの地理的変異。岡本朋子、蘇智慧(JT 生命誌研究館)
- P37. 一斉枯死後のササ群落は何年で回復するのか?・・・チシマザサ実生由来同齢個体群 30 年間の動態. 蒔田明史(秋田県大·生資), 齋藤智之(森林総研), 陶山佳久(東北大・農),

鈴木準一郎(首都大・理工), 牧田肇(白神またぎ舎)

- P38. 少数民族の伝統的竹利用とタケ類の人為的分布に関する研究。大野朋子(大阪府大・生命), 山口裕文(東京農大・農)
- P39. 神奈川県における海岸植物と非海岸植物の多様性分布パターンの比較。大西豆(神奈川県博)
- P4O. サワシロギクの湿地型と蛇紋岩型の遺伝的分化. 西野貴子(大阪府大・院・理), 大久保理子(大阪府大・院・理), 松尾朝子(宮崎市), 藤井伸二(人間環境大), 中山祐一郎(大阪府大・院・生命環境)
- P41. 標高万能植物ミヤマハタザオの適応機構:デモグラフィー・形質・遺伝子. 田中健太,平 尾章(筑波大・菅平セ), 恩田義彦(理研・PSC), 山田歩(東邦大)・永野惇(京大・生態 研), 瀬々潤(東工大), 清水(稲継) 理恵, 清水健太郎(チューリッヒ大), 岡村悠, 村上 正志(千葉大・理), 澤田有司, 平井優美(理研・PSC, JST・CREST)
- P42. 散布者の季節的変化がアリ散布型スゲ属2種の種子持ち去り率と散布距離に及ぼす影響。 田中弘毅 (鹿大連農)、鈴木信彦 (佐大農)

第 44 回 種生物学シンポジウム ポスター賞選考報告

ポスター賞選考委員会は、第44回種生物学シンポジウムでポスター賞にエントリーされたポスター中から選考を行いました。その結果、以下の3名に第44回種生物学シンポジウムポスター賞を授与することに決定いたしました。授賞式は、2012年12月8日(土)の種生物学シンポジウムの懇親会にて行われました(五十音順)。

ポスター賞選考委員会

大久保理子(大阪府立大学)

サワシロギクは分断化選択を受けている!?-湿地型と蛇紋岩型の生態的分化,そして"しんどい"中間型-(大久保理子・藤井伸二・中山祐一郎・西野貴子)

速水将人(北海道大学)

オオバキスミレにおける繁殖戦略の種内変異ー開放花・閉鎖花形成パターンの集団 間比較一(速水将人・細川一実・木村耕・大原雅)

山尾僚(佐賀大学)

被食防衛戦術の可塑的変異-花外蜜腺植物における生育場所に応じた異なる防衛 形質の適応-(山尾僚・波田善夫・鈴木信彦)

第44回 種生物学シンポジウム 参加記

山尾 僚

今大会では、生物に真っ向勝負を挑んでいる様な、清々しい研究の数々に巡り会うこと が出来たように思います。それは、長年の野外観察に加え、鮮やかな調査・実験手法を用 いて生物の生き様を解き明かそうとするもので、科学の確実な進歩を物語っているように 感じました。『タケとササの種生物学』では、巨大なクローナル植物の生態を分子生物学や 繁殖生態学、物質循環、構造生物学などの様々な視点からの解明に挑んでいる研究が紹介 され、多角的な視点で生物現象を捉える事の重要性と面白さを再発見させていただきまし た。また、『エコロジカル・エピジェネティクス』では、高度な技術を駆使した美しい研究 を目の当たりにし、種生物学の発展として1つの方向性を示唆していただいたような感銘 を受けました。今大会において、私は、植物が生育場所の利用可能な資源の種類や量に応 じて、用いる防御形質の組み合わせを可塑的に変えることをご紹介させていただきました。 本研究により、植物が実に巧みに自らの体を改変し、環境に適応していることが明らかと なりました。植物が防御システムを可塑的に改変していることを発見してから証明に至る まで、実に6年もの歳月を費やしましたが、ようやく、彼らの逞しい生き様の一端にほん の少し触れることができたように感じています。本研究発表を、ポスター賞に選考してく ださいました審査員の方々や、発表を聞き有益なご助言をくださいました方々には、深く 御礼申し上げます。

今後も、本学会大会に参加させていただくなかで、多くの独創的な研究に触れながら成長させていただければ幸いです。生物と真摯に向き合い、現象をより多角的で斬新な視点で捉え巧みな技術を駆使することで、「目からうろこ!!!」な研究を展開していけるよう、賞を励みに精進いたします。

速水 将人

私が種生物学シンポジウムに参加するのは、前回の富士 Calm で行われたシンポジウムに続き、2度目でした。発表は今回が初めてだったのですが、前回参加したシンポジウムの発表のレベルの高さや、その後の専門性の高い議論、指摘の奥深さに圧倒されてしまっていたので、最初からかなり緊張していました。しかし、初日の丸山先生の「好蟻性昆虫の多様性と系統進化」についてのご講演では、好蟻性昆虫の生態学的な面白さだけでなく、ツノゼミの形態の多様性、新種を記載する大変さなど、普段聞くことができない貴重な内容を拝聴させていただくことができ、緊張を忘れてとても感動しました。ポスター発表は2日目でしたが、プレシンポジウムのあまりの面白さとインパクトで、少し緊張がほぐれたのを思い出します。また特に印象に残っているのは、研究室の先輩である荒木さんと土畑さんが企画された「エコロジカル・エピジェネティクス」で、最先端の解析技術からゲノム配列の変化を伴わない生態学的事象を明らかにした様々な研究の話をじっくりと聞くことができ、自分の不勉強さを痛感する一方で、今後さらに新しいことにも挑戦していこ

うというモチベーションを強く持つことができました。

今回のシンポジウムでは、私の修士課程の2年間の研究成果をまとめたものを発表しました。私は現在、スミレ属植物における繁殖様式の進化について研究しています。スミレ属植物は、開花して結実に至る「開放花」と、蕾のまま開くことなく結実する「閉鎖花」という形態および機能的に異なる 2 タイプの花を形成します。しかしながら私は、オオバキスミレという北海道の低地林床に広く生育する黄色いスミレに、開放花形成後に閉鎖花を形成する集団(開放花・閉鎖花集団)と、開放花のみを形成する集団(開放花集団)が存在することを明らかにしました。さらに交配実験や根の掘り取り調査から、開放花・閉鎖花集団は、地下部でクローン成長を行わず、開放花と閉鎖花を介した種子繁殖で集団を維持していること、一方で開放花集団では、開放花では十分に結実せず、主に地下部でクローン成長を行い集団を維持していることを明らかにしました。今回のシンポジウムは、私の発表を本当に多くの方々が聞いてくださり、示唆に富んだコメントや、今後の研究に生かすことができる貴重なアドバイスを頂くことができました。

最後になりますが、足を止めて私のポスター発表を聞いて助言してくださった方々、ありがとうございました。また、この度荒木希和子先輩が片岡奨励賞を受賞された同じ時に、種生物シンポジウムポスター賞を受賞できたことを大変光栄に思います。御指導いただいている北海道大学の大原雅先生を始めとして、調査および研究に関する助言をいただいた共同研究者の細川様、木村様、研究室のメンバーに、この場を借りて御礼申し上げます。

6. 2012 年度総会の記録

2012 年度の総会は 12 月 8 日にシンポジウム会場にて開催されました。審議・了承事項を中心に報告いたします。

・ 会則の変更

上記の事務局の移動にともなう事務局の所在地・名称に関する会則の改訂が、出席者の3分の2以上の賛成によって承認されました。

・英文誌の出版について

未印刷の受理論文の蓄積等に対応するため、出版形態または出版契約の大幅な見直しが必要という見解が大原英文誌編集委員長から示されました。これに対し、大原編集委員長が中心となって早急に具体的な検討に入るとともに、学会としての判断は幹事会に一任することが承認されました。

その他

2013年度予算案が承認されるとともに,2012年度会計報告,2011年度監査報告, 和文誌編集委員会報告,日本分類学会連合・自然史学会連合および男女共同参画学協会 での活動報告が各役員によってなされました。次期シンポジウムは九州地区での開催が 検討されることになりました。

2012年度一般会計決算報告 (2012年1月1日~2012年12月31日)

収入の部	2012年収入 20	12年収入予算	支出の部	2012年支出 20	12年支出予算
国内会員会費	4, 674, 000	4, 000, 000	印刷費		
			(Newsletter No.44, 45)	38, 850	120, 000
購読料	168, 000	150, 000	出版委託費	4, 616, 846	4, 500, 000
バックナンバー	40, 690	200, 000	PSB 2012年 Vol.27(1- 3)	3, 615, 000	3, 500, 000
著作権料	128, 610	100, 000	和文誌 2010年 (33 号), 2011年 (34号)	1, 001, 846	1, 000, 000
PSBロイヤリティ			事務費	530, 622	528, 000
(海外会員の会費	329, 587	500,000	ACNetへの会務委託費用	378, 000	378, 000
を含む)			選挙	31, 592	50, 000
超過ページ代	130, 000	100, 000	その他	121, 030	100, 000
その他(利息など)	167	1, 000	和文誌編集補助	30, 000	30, 000
小 計	5, 471, 054	5, 051, 000	英文誌編集補助	250, 000	250, 000
			シンポジウム補助金	0	30, 000
前年度繰越金	2, 098, 683	2, 098, 683	会計監査交通費	20, 000	20, 000
合 計	7, 569, 737	7, 149, 683	学会賞	9, 632	40, 000
			自然史学会連合分担金	20, 000	20, 000
<会員数>			日本分類学会連合分担金	10, 000	10, 000
2012年12月31日	現在。括弧		男女共同参画連絡会分担金	5, 000	5, 000
内は前年度から	の増減を示		予備費	0	30, 000
国内会員	413 (+22)		小 計	5, 530, 950	5, 583, 000
一般会員	328 (+10)				
学生会員	72 (+12)		次年度繰越金	2, 038, 787	1, 566, 683
機関会員	10 (± 0)		<u></u> 숨 計	7, 569, 737	7, 149, 683
名誉会員	3 (± 0)		W do 3 o way - bull 7 o #b 4 o	34 000 TU-11	
海外会員	3 (± 0)		※収入の部における会費4,6 の会費の前受金2,256,000円		

収入の部	2012年収入
前年度繰越金	3, 253, 781
利息	526
수 타	3 254 307

2012年度片岡基金決算報告 (2012年1月1日~2012年12月31日)

支出の部	2012年支出
種生物学会片岡奨励賞副賞	100, 000
PSB論文賞副賞	13, 965
次年度繰越金	3, 140, 342
合 計	3, 254, 307

種生物学会 2013年度 予算案 期間:2013年1月1日~12月31日 収入の部 予算額 前年度予算 国内会員会費 4,000,000 4,000,000 0 購読料 150,000 150,000 0 バックナンバー 200,000 200,000 0 著作権料 100,000 100,000 +0 PSBロイヤリティ 400,000 500,000 🛦 100,000 (含海外会員の会費) 超過ページ代 100.000 100,000 +0 その他(利息など) 1.000 1,000 0 小 計 4.951.000 5.051,000 🛦 100,000 前年度繰越金 2,038,787 2,098,683 ▲ 59,896 合 計 6,989,787 7,149,683 🛦 159,896 支出の部 印刷費 Newsletter 50.000 120.000 ▲ 70.000 (No.46,(No47)) 出版委託費 4,500,000 4,500,000 0 PSB 2013年 3,500,000 3,500,000 0 Vol.28 (1-3) 和文誌 2012年(35 0 1.000.000 1.000.000 号), 2013年(36号) 事務費 490.000 528,000 ▲ 38.000 事務委託費 378,000 ▲ 378,000 0 冊子発送作業 230,000 230,000 0 選挙 50,000 ▲ 50,000 その他 260.000 100.000 160.000 和文誌編集補助 30,000 30,000 0 英文誌編集補助 0 250,000 250,000 シンポジウム補助金 30,000 30,000 0 会計監査交通費 20,000 20.000 0 学会賞 40.000 40.000 0 自然史学会連合分担金 20.000 20,000 0 日本分類学会連合分担金 10,000 10,000 0 男女共同参画連絡会分 5,000 5,000 0 担金 予備費 30.000 30.000 小 計 5,583,000 🛦 108,000 5,475,000 次期繰越金 1,514,787 1,566,683 🛦 51,896

6,989,787 7,149,683 🛦 159,896

合 計

1

2

3

4

2013年度 会費納入のお願い

種生物学会では、前納制をとらせていただいております。2013年度までに未納分がある方は、お振り込みをお急ぎ下さいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座 OO240-6-45544 加入者名:種生物学会

年会費: 一般会員 12,000 円 学生会員 6,000 円

(学生会員は振込み用紙の通信欄に指導教員のサインをもらってください)

※ 所属を変更された方、会費、退会に関するお問い合わせは、事務局までお願い致します。

〒448-0001 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学自然科学棟内 Email: office@speciesbiology.org

会員異動 (2013年9月末まで)※自宅住所のみの場合は非公開と致しました。

■新規入会(五十音順)	
■住所変更	
■退会	

書評: 新・生命科学シリーズ 植物の系統と進化

裳華房 伊藤元己 著 定価 2520 円 2012 年 5 月 ISBN978-4-7853-5852-5

地球は実に多様な生物で満ちている。この生物 ある被子植物の特徴と、彼らの多様化をもたらした いところである。近年の分子生物学的解析技術の急 速な発展とコンピュータ性能の向上により、系統学 は飛躍的な進歩を遂げている。本書は主に陸上植物 に焦点をあて、植物が陸上に進出してから被子植物 りやすく概観している。

本書は全7章からなる。1章では、近年の分子 系統解析などから明らかになった知見を元に、生物 栄に至るまでの進化過程を概観し、多様化の道のり 界の中での植物の位置づけや陸上植物に至る経緯、 植物の定義について詳細にまとめられており、「植 である。また、随所に明快な解説図やコラムが挿入 物はどのような生物であるか」について再認識する されており、日ごろ植物や分子系統解析などを扱わ も、植物の定義について即答することは難しい。私ができる。現在、植物と関わりのある方はもちろん、 自身も本章を通して植物に対する認識を新たにす これから植物学に携わる方や、他生物を取り扱って たした植物が、陸上環境への適応によって獲得した や、幾千の年月を重ねて営みを続ける大樹が、どの と考えられるさまざまな特徴について概説してい ような進化の歴史をたどり、皆さんの前で可憐な花 る。さらに、維管束植物の特徴がどのように獲得さ を咲かせ、勇壮 れてきたのかについても、これまでに提唱されてい な姿を見せるに る仮説を紹介しながら議論されており、進化生物学 至ったのか、本 者や生態学者にとっても大変興味深い内容であろ 書を片手に思い う。4章では、植物が陸上で獲得した最も重要な特 を巡らせるのも 徴の一つである種子に焦点があてられ、種子の起源 やタイプについて、挿絵を用いて分かりやすく解説 されている。実は、普段何気なく扱っている「種子」 の進化については未だ明らかになっていないこと も多く、今後の研究の発展が望まれているとのこと である。5章では、陸上で最も繁栄している植物で

多様性の一端を担い、支えているのが植物の多様性 原動力と考えられている花の起源について知るこ である。植物が地球上に生まれて以来、彼らが如何 とができる。そして、6章では、昆虫類との共進化 に多様化の道をたどってきたのかは興味の絶えな を通じて、被子植物が如何に多様化したかについて 概説されている。本章は、植物と動物の相互作用に 興味のある学生や研究入門者の方々にとって非常 に有用な内容であろう。最終章である7章では、前 章までに概説した内容を踏まえ、化石研究や分子系 に至るまでの進化の過程を系統学的視点から分か 統解析により明らかになっている陸上植物全体の 多様性と系統についてまとめられている。

以上のように、本書は植物が現在のような大繁 を旅することができる植物系統学の優れた入門書 ことができる。実際に植物を扱っている者であって ない方々にとってもストレスなく読み進めること ることができた。2章と3章では、陸上へ進出を果 おられる方々にも是非一読を勧めたい。路傍の野草

一興であろう。

(山尾 僚)



役員一覧

2013 年度から 2015 年度までの会長・副会長および幹事、執行部メンバーが以下のように決まりましたのでご報告いたします。

執行部

 会長
 川窪伸光
 (岐阜大学)

 副会長
 大原 雅
 (北海道大学)

 庶務幹事
 渡邊幹男
 (愛知教育大学)

 会計幹事
 常木静河
 (愛知教育大学)

 和文誌編集委員長
 陶山佳久
 (東北大学)

 英文誌編集委員長
 大原 雅
 (北海道大学)

学会賞選考委員長 西脇亜也 (宮崎大学)

監査委員 奥山雄大 (科学博物館)

監査委員布施静香(兵庫県立人と自然博物館)

監查委員 荒木希和子 (京都大学)

渉外担当 藤井伸二 (人間環境大学)

HP 担当 小林 剛 (香川大学)

男女共同参画担当 可知直毅 (首都大学東京)

幹事

北海道 久米 篤

東北 黒澤高秀, 陶山佳久

関東 堂園いくみ、石濱史子、角川洋子、亀山慶晃

中部湯本貴和,三名崇

近畿 加藤 真、工藤 洋、田村 実

 中国四国
 小林 剛

 九州沖縄
 新田 梢

※ 庶務幹事,会計業務は一括して事務局で行わせていただいております。

種生物学会ニュースレター NO. 46&47

編集 渡邉幹男(庶務幹事),常木静河(会計) 〒448-0001 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

発行日:

印刷所: